

かくれがちなる十六夜の

あはれ月のみさえわたる

故郷の友 同人

あられふる朝 雨のよる

鳥のなく音に 月かげに

うれしき事や うき節の

ま垣もなくて 語るべき

我がふる郷の 友三人

初秋の風 布士の舍主人

天の河さやかに見えてはしなくも

身にしみ渡る秋の初風

秋の山家

松風やましらの聲を友として

住む人いかに秋の山里

水 全 人

浪風の立たぬぞ御代の姿なる

臣に譬し水にしわりせば

山里の月 高木まつ子

妻戀ふる鹿のなく音に夢さめて

檜原の月をひとり見るかな

盆の月桐の葉越に澄めるかな 梟 睡

緇數尾芒にさして歸るかな 弦 月

鳴たつた沼の夕や月凄し 圓 侏

月天心街の踊盛なる 聽 濤

歸省して踊を見るや三年目 旭 子

蕎麥白き鳥や夕日赤蜻蛉 涼 月

稻妻や城樓の 鯨 天を突く
 神軍の魔隊を破る野分かな
 鵬のなく藪のあなたや夕榮す
 星逢ふ夜桔梗は既に苔みけり

松 軒
 杏 子
 郊 外



説 林

口は幸ひの基

高木四郎

世に口は「禍ひの基」といふ諺があるから、此處に「幸ひ」とあるのを、活字の誤植だなど思ふ人もあるか知らぬが、さうでない事は前號に母の

言葉と題して言つておいたのを見た人は知つて居らう、又さうでなくても、何と口は「幸ひの基」ではなからうか。物を食ふも口、物を言ふも口、食はなければ死ぬ、言はなければ仕事が進ばぬ。又いくら口を使へばとて口は不平をいはぬし、いくら物を食へばとて口は怒りはせぬ、尤も胃の腑で要求もしない時、あまり澤山にかたい物でも食ふと口は疲勞を訴へて動かなくなる。然しこれは自業自得で、口の罪にする事は出来そゝもない。手の奴足の乗り物よりは一層吾人のため必要な此の口は、何と愛すべきものではなからうか、然るに世はこれに向つて「禍ひの基」といふ酷なる評語を與へてゐる。

一弊此の「禍ひの基」といふ冷酷なる評語を此の口に與へたといふのはこれは「輕口」「饒舌」は勿論